

12. 楽音寺^{がくおん じ きょうがわら}経瓦

■ 指定日

昭和43年3月28日

■ 種別

兵庫県指定有形文化財 考古資料

■ 年代

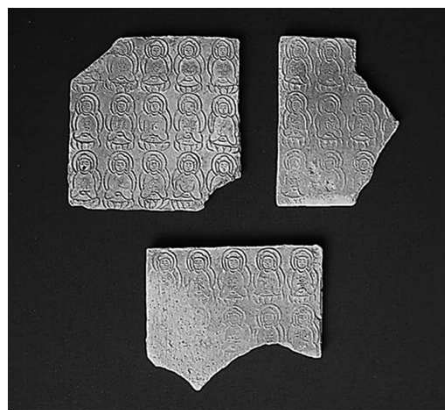
平安時代

■ 所在地

朝来市山東町楽音寺ほか

■ 所有者

楽音寺



■ 内容

完存品は17cm四方、厚さ1cmの板瓦。范型によって、阿弥陀像を5列・3段に陽刻し、1体毎の腹部に法華経を一字ずつ陰刻している。像は稚拙に見えるが、1体毎に表情の違いがあり、独特の味わいがある。

瓦経(経瓦)は、平安末期から鎌倉期にかけて末法思想が流行したころ、末世となっても経を未来に残すこと、また極楽往生・滅罪生善を願う一念から経文を紙や布、あるいは腐らないようにと銅板や瓦に彫り込んで納めた納経の一形態である。

大正14年(1925)楽音寺の旧屋敷(現在の西南約100mの寺奥)で、土取りの際地下約1.5mから発見されたもので、発見時には、厚手型の須恵器壺(口縁部厚さ1.1cm、口径は内径27.5cm、腹部の厚さ0.8cm)に納めてあった。

瓦経は県下3ヵ所ほどで出土しているが、仏像を刻したものはなく、全国的にも珍重すべき重要資料である。なお、完成品が東京国立博物館その他に分与されている外、県立歴史博物館に貸与、常時展示されている。